

会長の挨拶（3）小堀憲助の「ロータリー思想の理論構造」を読む

—「ロータリー思想自体の固有の難しさ」の第二について—

ロータリアン個々人のクラブを媒体とする奉仕活動が立体的な構造を持つことを指摘しなければならない。理論構造を示すことは組織論を待たねばならない。個人奉仕が中心であるので日常生活に気を配っていると、例会に出席しなければならぬと言う。例会である種の提案をすると、理事会に先議権あると言う。委員会組織内で職責を果たしていると思えば、他の委員会や理事会との連携が大事だと言われる。

個人奉仕そのものが一度クラブ組織内を廻って、また個人奉仕に戻らなければならない仕組みと成っており、これがロータリーの意味での切磋琢磨と呼ばれる作業なのである。その付随的要素として団体的奉仕が取られる場合がある。またロータリーは奉仕団体だと言うので奉仕に力点を置くと、親睦を基礎にすべきだと言われ親睦に重点を置くと、奉仕に直結しなければならぬと言う。ロータリアン個々人に課せられた責任はクラブ組織との絡み合いに於いては、一面的に把握することは出来ないことを意味するものであり、又ロータリーの団体としての奉仕そのものが個別的規模から言えば、奉仕と呼べる性質のものよりは、奉仕の手本乃至実験例を見るのを至当とするであろう。クラブ組織とロータリアンの奉仕との複雑な関係から、ロータリー思想の理論構造がかなり理解し難いものであると言うができよう。（小堀氏の上記の著書を筆者が纏めたものである。）

次回は—「ロータリー思想自体の固有の難しさ」の第三について—